



融合・共生・インタラクション

中日文化比较研究论集

(第一辑)

主编 王秋菊

监修 孙久富
山本幸男
铃木德男



东北大学出版社
Northeastern University Press

中日文化比较研究论集

(第一辑)

东北大学出版社

· 沈 阳 ·

© 王秋菊 2009

图书在版编目 (CIP) 数据

中日文化比较研究论集 / 王秋菊主编. —沈阳: 东北大学出版社, 2009.12

ISBN 978-7-81102-773-0

I. 中… II. 王… III. 比较文化—中国、日本—文集 IV. G122-53 G131.32-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2009) 第 227436 号

出 版 者: 东北大学出版社

地址: 沈阳市和平区文化路 3 号巷 11 号

邮编: 110004

电话: 024—83687331(市场部) 83680267(社务室)

传真: 024—83680180(市场部) 83680265(社务室)

E-mail: neuph@neupress.com

http://www.neupress.com

印 刷 者: 沈阳中科印刷有限责任公司

发 行 者: 东北大学出版社

幅面尺寸: 210mm × 297mm

印 张: 11

字 数: 315 千字

出版时间: 2009 年 12 月第 1 版

印刷时间: 2009 年 12 月第 1 次印刷

责任编辑: 牛连功

责任校对: 王艺霏

封面设计: 杨薇薇

责任出版: 杨华宁

ISBN 978-7-81102-773-0

定 价: 28.00 元

前 言

2008年9月9日，首届“融合、共生、互动——中日文化比较研究国际学术研讨会”在东北大学拉开帷幕。会议由东北大学中日文化比较研究所所长、外国语学院副院长王秋菊教授主持。东北大学校长赫冀成教授、日本驻沈阳总领事馆松本盛雄先生，日本长滨生物医学工程大学吉田保理事长等出席会议并致辞。

首先，东北大学校长赫冀成教授代表学校向研讨会的召开表示祝贺，对莅临会议的专家学者表示欢迎。他说，东北大学本着面向世界、开放办学的理念，先后与22个国家和地区的112所大学、科研院所建立了学术交流关系，特别是在与日本的交流方面，取得了显著的成绩。在中日两国关系转暖、积极合作的背景下，召开中日文化比较研究国际研讨会，将成为加强中日文化交流、增进相互理解、促进研究合作的一个新的起点。赫冀成希望东北大学中日文化比较研究所能够通过中日两国热爱和平、潜心研究的专家学者的共同努力，发展成为东北大学与日本进行交流合作的平台，成为中日科技与文化交流的重要窗口。松本盛雄总领事也在开幕式上致辞，希望研究所能够融合中日文化差异，相互合作，共同发展，将研究所办成在国内外有广泛影响的一流研究所。

其次，王秋菊教授介绍了东北大学中日文化比较研究所成立的背景和机构组成，并指出研究所将在“未来的文化将是科学与人文融合的文化，是不同文化不断交融的文化”的大背景下，认清21世纪中日文化研究新的特点与趋势，在“求同存异”“和而不同”的路径中，加强中日两国文化的比较研究与交流。

开幕式结束后，原辽宁省社会科学院副院长、东北大学文法学院名誉院长彭定安教授和日本京都教育大学名誉教授青木五郎先生分别为本届研讨会作了题为《中日文化：比较、交流与共建》和《以东北大学为信息基地共同构筑东亚文化圈之共生模式》的主题演讲。9日下午，会议开设两个分科会场，由中日两国50余位专家学者分别围绕中日文学文化比较、科学技术与文化两大主题发表了演讲。

本次研讨会邀请了来自日本的东京大学、京都大学、京都教育大学、大阪大学、名古屋大学、东北大学、立命馆大学、日本大学、明治大学、相爱大学等十余所大学的日本专家学者 15 人，以及东北大学、大连理工大学、大连外国语学院、辽宁大学、中国医科大学、渤海大学等国内 10 余所高校及科研院所的教授和学者 40 余人，以 21 世纪人文文化的发展趋势为论题，从“融合、共生、互动”的角度，就人文文化与科学文化的交叉研究展开了深刻而热烈的学术研讨。

众所周知，中国与日本是一衣带水的邻邦，拥有两千多年的悠久的历史文化交流史。然而，中日文化比较研究在中国可以说是近百年的事。在中国，由于一直以来认为与日本文化“同文同种”，从而采取“文化俯视”的态度，以至于中日两国间文化冲突不断，影响了两国在各个领域的交流与合作。东北大学中日文化比较研究所正是顺应新时代的需求，为科学文化与人文文化的融合、共生搭建平台，促进中日两国学者间的研究互动，为中日两国搭建真正理解与互相交流的桥梁。

首届“融合、共生、互动——中日文化比较研究国际学术研讨会”是由东北大学中日文化比较研究所、东北大学“985 工程”科技与社会（STS）哲学社会科学创新基地、东北大学外国语学院共同主办，从会议的召开到《中日文化比较研究论集》的出版，不仅得到了东北大学教务处、国际交流与合作处、科技处及东北大学产业集团、东北大学冶金技术研究有限公司的大力支持与资助，还得到了日本相爱大学人文社科研究所的鼎力支持与资助，在此表示最诚挚的谢意！

编 者

2009 年 12 月

目 录

融合、共生、互动——中日文化比较国际学术研讨会致词	赫冀成(1)
融合、共生、インタラクション——中日文化比較国際フォーラムにおける挨拶	松本盛雄(2)
中日文化比較国際シンポジウム開会式における挨拶	吉田保(3)

基調演 講

中日文化：比较、交流与共建	彭定安(5)
以东北大学为信息基地共同构筑东亚文化圈之共生模式	青木五郎(11)

部会 A：文学文化研究

東アジアの中の『万葉集』	梶川信行(17)
《源氏物語》中和歌的中文翻译	杜凤刚(26)
月のロマンス	孫久富(30)
中日コミュニケーションにおける摩擦の原因について	陳岩(42)
中国故事和歌二題	鈴木徳男(48)
日中比較研究と正倉院文書	山本幸男(58)
大伴坂上郎女の賀茂神社奉拝	野口恵子(64)
日本語コミュニケーション能力を高める教授法の研究	王岩 馬小力(68)
森鷗外と『高瀬舟』の庄兵衛、喜助	陳永岐 李宗鵬(77)
トータル学習としての外国語学習(1)	山田高志郎(85)

部会 B：科技文化研究

近代西欧数学の中日比較	佐々木力(95)
技術伝播と文化整合	陳凡(110)
居住行為様式の変化と住宅環境の変化で生じる衝突	羅玲玲(117)

大学の使命・大学の精神及び大学の文化についての試論	孫雷 (129)
日本人の精神基盤形成に及ぼした中国仏教と儒教	丸川雄浄 (133)
中国と西洋の伝統価値基準の下での『道を以て術を馭す』及びその影響	王健 (139)
収入格差から見た日本・新自由主義経済政策およびその動向	王海濤 譚曉軍 (145)
近代の中日・日中間における科学技術の地位逆転要因に関する解析	王秋菊 (149)
考证中日建交过程中的历史问题及其认识差异	毕克寒 (155)
『中体西用』と『和魂洋才』の比較研究	殷国梁 (164)

融合、共生、互动

——中日文化比较国际学术研讨会致词

东北大学校长 赫冀成

尊敬的日本国驻沈阳总领事馆总领事松本盛雄先生

各位专家、学者，女士们、先生们：

大家上午好！

中日文化比较研究国际学术研讨会今天在这里隆重举行，我代表东北大学，并以我个人的名义对会议的召开表示热烈的祝贺，对莅临会议的各位专家学者表示诚挚的欢迎！

东北大学是一所具有 85 年建校历史的国家重点大学之一，目前正在进行“985 工程”二期建设，为实现“多科性，研究型，国际化”的国内一流、国际知名的高水平大学的建设目标而努力奋斗。

本着面向世界、开放办学的理念，我校先后同 22 个国家和地区的 112 所大学、科研院所建立了学术交流关系；邀请了两千余位外籍专家来校任教、讲学和合作科研；聘请了数百名国内外著名学者为名誉教授和兼职教授；常年选派教师出国进修、讲学和科研合作。特别是在与日本交流方面，取得了显著成绩。

今年 5 月胡锦涛主席访问日本的“暖春之旅”，对加强两国间的战略合作伙伴关系，进而促进整个亚洲区域的经济与社会发展，都有着十分重要的意义。

在这样前所未有的、积极合作的大背景下，召开中日文化比较研究国际学术研讨会，中日两国学者共同探讨以和谐、共生、互动为主题的文化比较研究，将成为加强中日文化交流、促进相互理解、增进研究合作的一个新的起点。

同时，这次学术会议的召开，也标志着我校在人文文化与科学文化交叉研究领域迈出了更坚实的一步，并将促进我校人文学科的学科建设和科学研究的发展。

2008 年是中日和平友好条约缔结 30 周年，同时也是中日青年文化交流年。中日之间进行文化交流既要考虑到两国文化的差异，又要寻找其共同点，发挥文化交流深层次的作用。

我衷心希望，东北大学中日文化比较研究所能够通过各位乃至中日两国热爱和平、潜心研究的更多学者的共同努力，发展成为东北大学与日本进行交流和合作的平台，成为中日科技与文化交流的主要窗口。中日两国学者要“以史为鉴，面向未来，珍爱和平，维护和平，让中日两国人民世代友好下去”，充分发挥中日科技与文化交流的桥梁与纽带作用。

最后，衷心祝愿各位专家学者身体健康！预祝大会圆满成功！

谢谢！

融合、共生、インタラクション ——中日文化比較国際フォーラムにおける挨拶

日本国在瀋陽日本総領事館総領事 松本 盛雄

尊敬する東北大学赫冀成学長、尊敬する来賓の皆様、学生の皆様：

本日ここに東北大学中日比較文化研究所設立式典及び国際フォーラムに出席でき光栄です。まず、在瀋陽日本国総領事館を代表してここよりお祝い申し上げます。また、日本から遠路はるばるおいでいただいた日本側専門家各位のご来訪を歓迎いたします。

先ほど赫学長より本研究所及び日中関係などについて詳細なご挨拶がありましたが、すべての点で私は学長のご意見に賛成します。

ご存じの通り、日中関係はこの2年あまりの間に、両国の指導者による相互訪問などを通じて大きく発展してきました。目下、両国は「戦略的互惠関係」の構築を目指して新たな局面を迎えています。そのような時期にこの研究所が発足することは誠に時宜を得たものであります。「戦略的互惠関係」とは幅広い意味を持つものでありますが、私は、両国指導者間の共通認識として最も重要なのは、相互理解と信頼の増進であると考えています。そのために日中双方の交流が不可欠であり、文化の比較ということも不可欠です。従って、それを実際に推進していく母体である本研究所の設立は大いに意義のあることであります。

この中国東北地方は東アジア地域において戦略的に重要な位置を占めています。昨今、政治・経済を含め世界情勢がめまぐるしく変化する中であって、この東北地方において日中両国がともに交流と協力を強化していくことは、東北アジア地域の平和と安定、ひいては世界の平和と安定に大きく貢献するものであります。

東北大学は創立以来これまでに多くの優秀な人材を輩出されてきました。とりわけ日中関係における人材は、赫学長を始め多くの本学指導者が日本留学経験を有することからもわかるとおり極めて充実しています。

このように天の時、地の利、人の和という条件を具備した東北大学中日比較文化研究所は、今後日中間の比較文化という学術交流の強化だけでなく、日中の友好増進のために大いにその力を発揮していくものと確信しています。

最後に、本フォーラムの成功をお祈りするとともに、ご在席の皆様のご健勝を祈念し、ご挨拶と致したいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

中日文化比較国際シンポジウム開会式における挨拶

日本長浜バイオ大学理事長 吉田 保

今日は、東北大学日本文化比較研究所の初めての国際的事業であり、研究所活動の事実上のスタートを告げる意義あるシンポジウムを、かくも多数の参加者を得て開会できましたことを、皆さんと共にお喜びしたいと思います。

開会を迎えるに当たって、東北大学の赫冀成学長を初め、関係する諸先生方、日本語学部並びに外国語学院の先生方、とくに中日文化比較研究所所長の王秋菊先生と関係スタッフの皆さんのご献身とご尽力に、心から敬意を表し、感謝を申し上げる次第です。

また、国際シンポジウムにふさわしく日本の東京、京都、大阪などから 50 名あまりの、専門の先生方に遠路をかまわずご参加していただいております。改めて感謝とお礼を申し上げる次第です。

さて、私は、中日文化比較研究所のスタートを飾ることになったシンポジウム開催が、今日、如何に重要な意味を持っているのか。又、中日文化比較研究所のこれからの活動と事業が中日間はもとより、国際的にも高く評価され、大きな期待が寄せられていることについて、大成功を収め終了した北京オリンピックの例を取り上げて私なりの見解を述べさせていただき、研究所顧問としてのご挨拶に変えさせていただきます。

ご承知のとおり、北京オリンピックは全世界の人々をテレビの前に釘付けにしました。まさに、オリンピック史上、最大規模、最高水準、最高記録を出して幕を閉じ、今世紀を代表するスポーツイベントとして大成功を収めました。

私はここで、北京オリンピックの成果や問題点について総括的に指摘したり、評価しようとは思っていません。私が申し上げたいことは、北京オリンピックが、私どもの中日文化比較研究活動にとって格好の研究テーマと課題を、提起してくれているのではないかということです。

すなわち、オリンピックというのは開催当事国はもとより、参加する国々や地域・民族の「歴史的で多彩な文化状況」が象徴的にかつ集中的に反映される、国際的な一大文化催事です。それはスポーツ文化を初めとして、健康・生活文化、科学技術文化、都市・建築文化、芸術・放送文化、歴史文化、環境保全文化、社会経済文化など、実に多彩で総合的なものです。特に開催当事国の「多彩な文化状況」と、その「成熟度」を、見事なほど鮮やかに、かつ華やかに表現し、全世界に発信するステージとなります。

したがって、世界の人々はマスコミを初めとする多様なメディアを通じて、中国の今日の「文化状況」とその到達点を知る、絶好の機会となりました。

しかし、そこから知り得た、中国の「文化状況」についての理解が、現実には照らして客観的で正確なものであったか、どうかについては、残念ながら問題あり、といわねばなりません。つまり、世界の国々や人々の中国の文化や歴史に関する知識や情報量、その理解の程度によって、異なった印象と受け止め方に差が生じたことは否めません。それにより、当然のことながら、オリンピック終了後は、国々に

よってさまざまなリバウンドが起きました。

ちなみに、日本におけるオリンピックの開会式や閉会式等に見られたマスコミの報道傾向や、オリンピックを終えての「総評」的な論調の一端を紹介してみましょう。一言でいって「成果を過小に」「客観性と公正さを欠いた」、いわゆる傾向性の強い情報が流されて、説得力がありませんでした。

即ち、中国の「大国主義的」な傾向や、「中国脅威論」を煽りながら中国の環境問題や民主主義、民族問題などについての理解の無さ、立ち遅れなどを取り上げて、中国が依然として抑圧的な国であることを印象づけていたことが目立ちました。つまり、主として日本側に責任のある根深い偏向した歴史認識（歴史文化）を背景とした、中国の目覚ましい経済発展に目をつむる「脅威論」、未だに根強い民族蔑視の日本大国主義（ナショナリズム）の考え方などは、日本のマスメディア（放送文化）が影響を与えていることは間違いありません。

私が結論的に申し上げたいことは、オリンピックは4年ごとに一回開かれる、世界的に多様な民族文化が集合し、同時に人類が創り出してきた文化の成果が総合的に花開き、触れ合い融合する一大文化イベントであるということです。

だからこそ、それぞれの国と人々が育ててきた固有の歴史と文化を理解し、共有化していくこと。さらに、国境を越えた日常的な文化交流活動をもっともっと盛んにして、真実と人間の尊厳、平和と豊かな人類社会の持続的発展に役立つ、文化の発展を目指さねばなりません。その意味で、東北大学中日文化比較研究所の果たす役割は大きく重要であり、その活動への期待は絶大なものがあります。

このシンポジウムを出発点として研究所活動を盛んにし発展を期しましょう。私も微かながら、頑張らさせていただきます。

どうもありがとうございます。

中日文化：比较、交流与共建

中日文化比较研究所中方名誉所长 彭定安

我们向来以“一衣带水”来描述和形容中日两国的地缘关系。这个概念是准确的，但又是历史性的，从长时段看，是变动不定的。历史的记录显示：在30万—8万年前、4万—3万年前、1.4万—1万年前，陆桥曾经4次排挤走浩瀚海水，架起在中国大陆和日本列岛之间，两国的祖先可以从陆上横跨大海，接触交流。而现今的“一衣带水”则是在大约一万年前的全新世之初，由于冰期的基本结束、气候的转暖、地壳的变动等原因，海水逐渐回升，淹没了陆地，大陆与列岛又成为隔海相望，一衣带水了^[1]。

这种历史的地质变迁和人类始祖的亲缘，引发我们思索的不仅是沧海桑田的历史兴叹，更重要的是产生一种深沉的历史感和玄妙的未来感。它启示我们要从法国年鉴学派提出的“长时段历史观”来反思历史、观察现实和设想未来。我们要有一种扩大的文化胸怀和历史气度。在一种现实与历史结合的基础上，我想借此机会与诸位共同探讨以下几个互相关联的问题。

一、在比较文化与接受美学视野中的中日文化

我们在研究中日文化及其比较与交流时，有一些基本观念是需要先行确立的。人类的不同群体之间，从不同地区的不同民族之间到同一地区的不同人群之间，交流的需要都是自然的和必然的。前者尤其如此。这就是所谓人类的“传通欲望”或“传统饥渴”（communication hunger）。人类的这种“传通”是文化的和文化性的，它必然是一种文化交流。无论是物质的、生产的，还是精神的、生活的，无论是技艺的还是习俗的，都是文化的。因此，在不同区域、不同民族之间的传通则是跨文化传通，也就是文化交流。在交流之中，必然在事前和事后的引进和吸纳中进行比较和选择。这种比较和选择，都是“以我为主”的，站在本民族的文化立场，从本民族的文化角度来进行。所以，在比较、选择、接受过程中，既会从自己的文化视野、价值观、生活需求出发，又会以此为依据来予以跨文化诠释，在异文化身上敷上自己的文化色彩，从而使异文化“皈依”自己，“为我所用”，实行和完成文化传通和文化交流的目的。

比较文化研究要在对比和求同寻异中发现和发掘各自文化的相同、类似或不同以至相反的特征、优劣和彼此交流互补的可能性。这种比较往往能够因为“他山之石，可以攻玉”的功效，而使彼此不仅发现对方的优长，还能够“自我发现”原来未曾自觉到的优长或缺失。在比较中鉴别，在比较中发现，在比较中汲取和进步，这是比较文化研究的文化学术功能。对于中日文化比较研究来说，情形尤其是如此。因为它们有同根同源之因缘，又各自独立地发展；它们之间的交流最是源远流长；它们的类同很多，但各自的特征又很突出。

我们从两个民族、两种文明的比较文化研究中，能够体察和总结一般文化的性质、特征和功能，从而加深对文化的认知。在中日文化比较研究中，也是如此。而且，由于其中的影响研究能够多方面与深层次地展开，又由此能够很好地展开接受研究。因此，在研究中也就可以更多、也更易于体现文化的性能和本

质。

因此,中日文化比较研究是一个内容十分丰富并富有意义、很有发展前途的研究课题。

二、互补与共进:中日文化交流史的鸟瞰

中日文化交流真正是源远流长。而在这种“源远流长”的交流中,主要的是中国作为“输出方”向日本列岛传输文化,而日本作为“接受方”受惠。到19世纪中期以后,先是逐渐而后则是彻底地“天翻地覆”地转变了。不过,我现在,暂时停留在19世纪初的历史门口,谈论此前的历史情形。

(一) 中国文化向日本列岛的输送及其意义

“昔年徐福求仙药,直到如今竟不归。”徐福渡海,居留东瀛,在中日两国广泛长久流传,虽史实仍然无从考证,但口传历史与民间传说,在本质上反映着历史的真相。据日本学者利用C14对来自中国大陆的稻种、丝织物的测定,在公元前三四世纪,即日本的绳纹末期前,有大批中国移民,带着生产技术、先进文化和生活方式,跨越大海,登陆日本列岛,把大量的中华文化因子和资源,输送给岛国居民,并在此生根。他们先被日本人称为“归化人”,后又纠正为“渡来人”。他们携带了生产技术与生产物资,携带了劳动技能与生活智慧,携带了先进的文化。他们大大地促进了日本列岛的生产发展、生活优化、文化进步。其中应该特别提出的是水稻的种植、普及和发达,它使日本列岛由落后的采集社会从根本上转变为农耕制社会。

其后的两晋时代,日本列岛已经从弥生时代进入古坟文化时代,公元4世纪初在大和地方更出现了大和朝廷——新的国家政权产生了。这时期,中国移民大举渡海“来归”,达到一个来自中土的移民高潮。他们之中有着众多的手工业和纺织技术人员,适应了日本从农耕文化向农业和手工业分工发展的社会需要,进一步推进了生产的发展和社会的进步。南北朝时期(公元420—589年)中日文化交流不仅再次前进,而且可以说,进入一个新阶段,交流的内容和层次都有新的、重大的发展。这时期进入日本列岛的中国移民,合理地被日本称为“新汉人”,以区别于两晋时期移入的中国移民。

公元6—9世纪,即中国的隋唐时代,日本的大和时代后期到奈良时代与平安时代,中日文化交流达到新的高潮。这次不是渡来与归化的“送”的方式,也不是南北朝时期的“接”的方式,而是日本向大唐连续、分批、大量派遣“遣隋僧”、“遣唐僧”、留学生、留学僧,来华居留学习,人数多、时间长、学习方面广泛、学习程度深入。除了学习建筑、城市建设、生产技术等之外,学习的主要方向是精神文化与制度文化,政制、律令、艺术、诗歌,等等,均悉心学习修炼,积极掌握。然后带回日本,传授、传播。使日本民族的社会、制度、生活、文学艺术以至整个物质世界和精神世界,获得巨大的发展,进入一个更高的层次。

宋元时期(公元907—1368年),日本经历了平安时代和镰仓时代,开始进入封建武士掌权的幕府时代。在这个动乱变异的时代,在中日文化交流方面,突出的事件和文化因缘,主要有:出现了短期居留日本的中国侨民并一步步得到发展。大批的中国僧人入日,也是这时期的重要文化现象。他们被日本称为“入日宋僧”和“入日元僧”。他们之中不乏博学高僧,随身带来了佛教,带来了建筑,带来了儒道百家,带来了诗词歌赋、音乐绘画。

明清之际(从明朝建立到鸦片战争爆发,公元1368—1840年),中国向日本遣民和中国文化向日本传播,又有了新的特点,并且异常突出。这时期,有政治上的明朝遣民旅日,有海上被掠或从倭的“军事移民”,有从事海上贸易的商人,还有旅游、避乱、遇险漂流的各种移民,更重要的是有一批因交流或应聘

而移民日本的中国文人学者。他们在宗教、经济（从寺院经济到社会经济）、生产、建筑、文学艺术等方面，对日本的发展，起了不可磨灭的作用。

从上述历史的回溯和鸟瞰中，我们可以得到这样一些认识和感受。

1. 在这一从公元前 300 年到 19 世纪初的长达 2000 多年的历史交往中，中国始终是作为“输出方”，不断地向日本传输中华文化；而日本则主要是作为“接受方”，接续引进、吸收、消化、运用中国文化。

2. 中国作为“输出方”的文化传输者，其传播的渠道，有陆路和海上两条通道。陆路是通过朝鲜半岛这个文化桥、文化跳板，过渡到日本列岛；海上则是跨海直接登上列岛。这两条渠道，一直是比较畅通的。文化主流泛海直达日本，灌注于它的生产、生活的各个方面。

3. 这种传输，在时间上是一贯的、不间断的；在层次上是不断前进、不断发展的；在组织上是成建制的；在文化上是成体系的；在物质文明和精神文明上是全面的，其中包括文化的经典、精华，生产的技术技能，文学艺术的创作，语言文字的创造，生活的智慧与方式，等等。

4. 日本本土文化在中国文化的帮助和滋润下得到进一步发展和提高，更规范，更具有文化的精魂。越南所说的“化训国俗”，可以恰当地形容这种作用和意义。

5. 虽然如此，但是日本文化在接受与消化能力上，在从外国拿来、为己所用上，却表现了巨大的勇气、民族自信心和文化魄力，特别表现了虚心的态度和勇敢精神，而且能够在接受中立足自身，进行选择、改塑和创造。因此能获得成功并且不失去自己。

（二）日本“桥”：在中国文化现代化中的作用

从 19 世纪中晚期到 20 世纪初，特别是日本明治维新后，中日文化交流的状况发生了根本性变化，情况正好颠倒过来，日本成为文化的“输送国”，而中国则成为文化的“接受国”。当时，中国向日本派出留学生数以千计，达到历史的高潮。当时的中国，积贫积弱，救亡图存，急切地向外国学习。其中，有两支留学大军。一支是“西路军”，留学欧美，胡适是其中的主要代表人物之一；另一支则是“东路军”，留学日本，鲁迅是其中的主要代表人物之一。“东路军”主要学习的，正如鲁迅所说，是“警察法政，声光化电”，也就是政治、军事、法律和科学技术，学习人文科学的相对较少。这和当时中国的“民族母题”是“坚船利炮，富国强兵”有关。我们大体上可以确定，中国当时从日本输入的，是政治科学、军事科学、法学、经济学，还有现代科学技术。可以说，中国早期的现代学术文化的兴起和建立，留日的“东路军”起到了重要的作用。这是中国人应该感谢日本的。中国的自然科学、医学、文学艺术，都曾经有过日本学派和欧美学派之分，反映了从日本学习和取经的重大影响。尔后，20 世纪中期的“五四”运动的发动，也与“东路军”的文化因缘深厚，“五四”运动中的主将和思想领袖，大都出自“东路军”，其中李大钊、陈独秀、鲁迅、周作人、钱玄同等都曾留学日本。

我们可以说，日本现代文化，对于中国的现代化进程，对于中国学术文化的现代化，起到了至关重要的作用。这种作用，很重要的方面，是发挥一种文化“桥”的作用。日本这座“文化桥”，在三个方面发挥作用，产生影响，推动着中国文化从传统向现代转换。

1. 连续的、大批的留学日本的人们，学习日本明治维新“脱亚入欧”之后建设发展起来的现代文化。它既是日本的，又是欧美的，同时是现代的，是原来的“汉学”经过改造、渗入西学，而成为了“洋学”。过去的学生，现在成为先生了。中国人向日本学习日本的“洋学”，这种学习的范围是相当广泛的，涉及自然科学、技术科学、社会科学、人文科学的诸多方面。

2. 中国留学生，通过“日本文化桥”，学习西方现代科学技术和人文科学。这是日本从西方输入、引进的西方文化，是日本的文化现实和文化存在，它提供给中国的学习者，使他们能够在“日本文化桥”上

获得他们“够不着”的西方文化，其中包括语言的障碍。鲁迅的许多欧洲和俄罗斯文学作品的译作，都是从日文转译的，也就是说，是从日本桥上转运来的。

3. 中国的留东学子们在日本桥上“眺望西方”，间接地学习西方现代文化和科学技术。比如鲁迅接受德国的尼采的过程，就是通过日本桥完成的。

在科学技术的引进方面，也是如此。

这些，大体上是 19 世纪末到 20 世纪中期的情形。中间有一段断裂。

到了 20 世纪中期，即中国改革开放以来的新时期，文化的交流又有了新的状况。这时期，完全改变了历史的轨迹，既不是中国是“输送方”、日本是“接受方”，也不是日本是“输送方”、中国是“接受方”，而是实现了“均等对流”，即双方都既是“输送方”，又是“接受方”。但是，情况也并不那么单一，那么平衡。处在改革开放时期的中国，在自我封闭 20 多年之后，需要从日本学习的方面更多，也更为迫切。首先，日本是从器物层向中国输出。日本电器，从日常细小的家用电器到工厂企业使用的机器，流遍了全中国。松下、索尼的声誉，响遍神州。日本电影在改革开放的初期，红遍中国。影片《追捕》，从故事、人物到音乐和演员，使刚刚开始“睁开眼睛看世界”的中国人，欣喜不已。卡拉 OK，唱遍中国的大江南北。从这些里面，传播着日本的科学技术、思想文化、文学艺术以至生活方式。

从总体上来说，这些文化交流和文化输出的方面，涉及科技文化、人文文化、城市文化、商业文化、学术文化，以及多方面的文化的现代性内涵。

我们看到，在新时期，日本对中国来说，虽然仍然起着文化桥的作用，但是已经不仅是文化桥作用了，它本身已经是一个强大的文化输送方了。

三、“青”与“蓝”：中日文化比较

中国有句老话：“青出于蓝而胜于蓝。”我现在借用这个比喻，不是想说明谁是“蓝”、是先生，谁是“青”、是学生；而是借取这个比喻，用两种相近的颜色，来标志相同又不同的两种文化的亲缘关系和特征。

英国历史学大师汤因比提出世界有 13 个文明和 15 个周边文明。其中一个“东亚文明”。他认为，“东亚文明是以称之为大文明的中国文明为核心的，它的周边有三个‘卫星文明’即日本文明、朝鲜文明和越南文明。”^[2]同处于东亚文明之中，中日文化有着许多共同处；但是，各自使用不同的“陶杯”所饮进的“生活”之源泉很不相同，又有着非常不相同的历史，其文化上的相异是很明显而突出的。下面，我谨不揣浅陋，作一些比较。

中国文化是一种特别突出的和合文化，从它的主要文化精神来说，是强调“天人合一”“敬畏自然”“和平”“平和”“和为贵”“和气生财”；从它的组成来说，是儒、道、释三者合一，而以儒家文化为主体。它在总体上是一种伦理文化，人文精神强。日本文化则不同，它是一种“合金文化”。它在日本自身文化的基础上，先是接受汉学即中国文化的深深的影响和濡化；以后又曾接受荷兰文化的影响；明治维新提出“脱亚入欧”，又全面性地接受西方文化的影响，普泛而深入地以西学即“洋学”改造、濡化了原来深受中国文化影响的文化，从而形成“大和文化”——“汉学”——“兰学”——“洋学”共同组成的日本近现代文化——“合金文化”。这种文化具有很强大的优势。它是日本明治维新、资本主义发展和现代化的文化动力和文化资源。

中国现代国学大师钱穆指出，中国文化是内倾性文化，它讲的是“人文化成”；其精髓是天人合一，道法自然，重视人文的力量；而西方文化是外倾性文化，它的精神则是“开物成务”，开发自然，干某事

成某事，“发挥聪明智慧，技能才力，一切表现到具体物质上面去”（钱穆）。中国另一位国学大师梁漱溟在他的《东西文化及其哲学》中，也说“西方化物质生活方面的征服自然，中国是没有的，不及的”；“西方化学术思想方法的科学方法，中国又是没有的”。但是日本文化不是如此。它既有受中国文化影响的、不同于西方文化的“人文化成”品性，又因为很好地接受西方文化的长处，并且切实应用，而具有西方文化的“开物成务”的精神。这在开发利用自然方面、科学技术的创造发明方面以及运用科学方法方面，都有很好的体现。日本工业产品（比如汽车产业），尤其是第二次世界大战之后，在开发电器产品方面的成功，便很突出地表现了这一点。

中国文化向来重农轻商，所谓“士农工商”、“工农兵学商”，商总在最后，这是儒家思想的一个结点。日本虽然深受儒学的影响，但是，在德川时代崛起了商人文化的观念，如敬业、自制、节俭等。山本七平在他的《日本资本主义精神》一书中说：“德川时代，是一个告诉人们上自诸侯下至庶民如果不懂得经济，不遵循‘资本主义逻辑’就会走向死亡的时代。”这种精神气质，变异了以儒教为核心的日本民族精神，导致了日本资本主义的发展以至现代化事业的成功。中国在计划经济实施二十多年之后，建设市场经济体制，那种轻商的文化气质，才开始发生变化。

中国文化是一种特别富于伦理性的文化。“仁者人也”，重视人伦关系、血缘关系。但是中国文化缺乏集体精神。重视亲属关系，常常成为中国人的一种社会负担。至今有不少贪污官员，往往是在“照顾亲属”方面出了问题，或者从这里打开缺口进而出了问题。中国现在的家族式私营企业，常常失败于亲属问题上。有一种“小舅子是最厉害的杀手”的调侃说法，反映了最亲的亲属坏事的现象。但是，日本文化中这种负担不重，或者没有。日本重视一种被山本七平称为“虚拟的血缘集团”的精神，即同在一个集团，就构成一种虚拟的父子兄弟关系。这种精神同现代意识的结合，就成为一种现代的人际结合与人际结构，就是团队和团队精神。这是日本人能够团结的文化精神保证。

现在，我再在民族精神气质、精神结构方面，略作一些比较。中国人以儒学为宗教，富于伦理精神，而缺乏宗教精神。佛教、禅宗在中国都有很深的影响，是灌注于中国人的精神气质之中的；但中国人并不普遍信佛教和入禅。不像日本那样，佛教曾经被定为国教，佛教和禅宗进入了社会小传统，进入世俗生活。山本七平说的“在世俗的业务中发现宗教性的意义”，把宗教和赚钱、商业结合了。而中国人的宗教思想精神却并不发展，倒是迷信行为严重。

中国与日本的审美文化有着很深而久远的渊源，但是其中的差异也是很明显的。在中国文学艺术中体现的审美文化，“道”是一个根本性范畴，而其意义则具有两个重要而不同的内蕴，一个是道家文化中“道法自然”的“道”，它就是“自然”，是情系自然和与自然和谐合一；另一个意蕴则是政治与道德的“道”，即“文以载道”。因此，道德教化、忧患意识、情系苍生，是重要的意蕴。此外，冲淡、超脱、优雅，是重要的美的标识；而“气”、“势”、气韵、境界，则是审美的高层次理想境界。日本的审美文化中，雅（高雅）、物之哀（自然伤感），佗（幽静）、和“寂”（雅静），是重要的和主要的范畴。日本的审美文化精神，体现了“菊花与刀”的“菊花”方面的气质和神韵，具有一种不同于中国美的东方美学境界。这在日本的物语、俳句、浮世绘、能乐中，都很充分地体现出来了，就是川端康成的小说和东山魁夷的散文中，也有很好的体现。

四、中日文化交流：互利、共进与同建

由于中日文化的相同和不同，我们之间的文化交流是很自然、很必要，也很重要的；通过交流我们可以在文化上互利、共进，而且通过互相的取长补短，我们应该可以共同建设和发展东亚文明。事实上，以

日本,以“亚洲四小龙”——韩国、新加坡和中国的香港、台湾——为代表的现代化东亚模式,现在再加上中国大陆的现代化迅速发展,已经构成了不同于西方现代化道路的第二个现代化模式。这也是东亚地区和汉字文化圈的文化复兴。以人类自然家园遭受严重破坏、环境污染、生态失衡、社会心理危机、科技负面效应惊人为代价的,西方现代化道路和模式,受到了严重挑战。而中国文化精神的魅力重现,已经在世界面前显示了重新整理、诠释和改塑东方文化中的东亚文化,是大有利于人类探索新的现代化道路和目标体系的。

前述梁漱溟的著作中说到过:“东方文化无征服自然态度而为与自然融洽游乐的,实在不差。这就是什么?即所谓人类生活的第二条路向态度是也。”去其偏颇和与时代的隔阂,这种东方文化精神的合理核心,正是环保意识、拯救地球、与自然和谐、人性地使用科技等现代化新意识、新理念的核心内涵。东亚文化的新精神也就蕴含其中。现在,以科技为先导的现代化模式,已经在被以文化为先导的现代化所取代,至少是用它来纠偏。人类文化的高科技型也正在应用人文文化来改塑,以成为科技—人文型文化。富于人文精神的中国文化,在自身从传统向现代转换过程中,又可以发挥这方面的作用,作出自己的贡献。

参考文献

- [1] 刘德有,马兴国.中日文化交流事典[M].沈阳:辽宁教育出版社,1992.
- [2] 山本新,秀村欣二.中国文明与世界:汤因比的中国观[M].北京:东方出版社,1988.

作者简介:

彭定安 1929年生于江西省。东北大学文法学院名誉院长、教授。东北大学中日文化比较研究所中方名誉所长。辽宁省文史研究馆馆员。主要研究领域是中国现当代文化、鲁迅研究、艺术心理学和文化社会学。